丸山遺跡

国道１５３号線箕輪バイパス建設に伴う
丸山遺跡の第２次緊急発掘調査報告書

１９９４年
長野県伊那建設事務所
上伊那郡箕輪町教育委員会

丸山遺跡

国道１５３号線箕輪バイパス建設に伴う
丸山遺跡の第２次緊急発掘調査報告書

１９９４年
長野県伊那建設事務所
上伊那郡箕輪町教育委員会

序

丸山遺跡は、箕輪町沢区、町立箕輪北小学校の西側に位置し、河岸段丘の上に所在する遺跡の一つであります。周辺は、西天竜用水路の開設によって水田地帯となりましたが、以前はクヌギを中心とした雑木林が広がっておりました。地元ではこの一帯を「ドングリ山」と呼び、皆から非常に親しまれた場所でした。しかし、近年における人口増加も手伝って、住宅地としての変貌を遂げつつあります。ここはまた、多くの土器・黒曜石を採集できるところとして知られており、その多くは小学校に大切に保管されています。

平成元年には、国道153号線・箕輪バイパスの建設工事に伴って本遺跡の第1次発掘調査が実施され、縄文時代、奈良・平安時代の住まいの跡から当時の生活を物語る土器や石器などが多数出土しました。そして今回、同工事の関連による、丸山遺跡の第2次調査を実施し、前回同様に非常に内容のある成果を納めることができました。結果につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、広く活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業に対し多大なご理解とご協力をいただいた各関係諸機関並びに調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

1994年3月

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

教育長 堀口 泉

例　言

1．本書は、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪1098-5番地他に所在する丸山遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。平成５年８月20日から平成５年10月12日まで調査を実施し、平成６年３月10日まで整理作業及び報告書の執筆作業を行った。

3．本書を作成するにあたって、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の復元－福沢幸一

石器の石質鑑定－樋口彦雄

遺構図の整理・トレース－赤松　茂、根橋とし子、西出あゆみ

遺物の実測・トレース－根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、宮脇陽子、百瀬千里

挿図作成－赤松　茂、根橋とし子、西出あゆみ

写真撮影・図版作成－赤松　茂

4．遺構図は、次の縮尺に統一した。

１：４０、１：６０

5．遺物実測図は、次の縮尺に統一した。

土器実測図－１：４、縄文土器拓影図－１：３、石器－２：３、１：３

6．本書の執筆は、赤松　茂、宮脇陽子が行った。

7．本書の編集は、赤松　茂、根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、百瀬千里が行った。

8．出土遺物及び図版類は、全て箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

本文目次

題　字　　団長　樋口彦雄

序　　教育長　堀口　泉

例　言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1

第1節　調査に至る経過……1

第2節　調査組織の編成……2

第3節　調査日誌……3

第Ⅱ章　遺跡の立地……5

第1節　自然環境……5

第2節　歴史環境……6

第Ⅲ章　調査の結果……8

第1節　調査方法と結果概要……8

第2節　土層堆積状況……9

第Ⅳ章　遺構と遺物……10

第1節　住居址……10

第Ⅴ章　まとめ……23

挿図目次

第１図　位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……7
第３図　調査範囲図……8
第４図　全体図……9
第５図　土層堆積図……9
第６図　２１号住居址実測図・遺物出土状況図……11･12
第７図　２１号住居址出土土器実測図１……13･14
第８図　２１号住居址出土土器実測図２……15
第９図　２１号住居址出土石器実測図……16
第10図　２２号住居址実測図……19
第11図　２２号住居址出土土器実測図……20
第12図　２２号住居址出土土製品・石器実測図、土器拓影図……21
第13図　２２号住居址出土石器実測図……22

表 目 次

第１表　周辺遺跡分布一覧表……6
第２表　２１号住居址出土石器観察表……17
第３表　２２号住居址出土石器観察表……22

図版目次

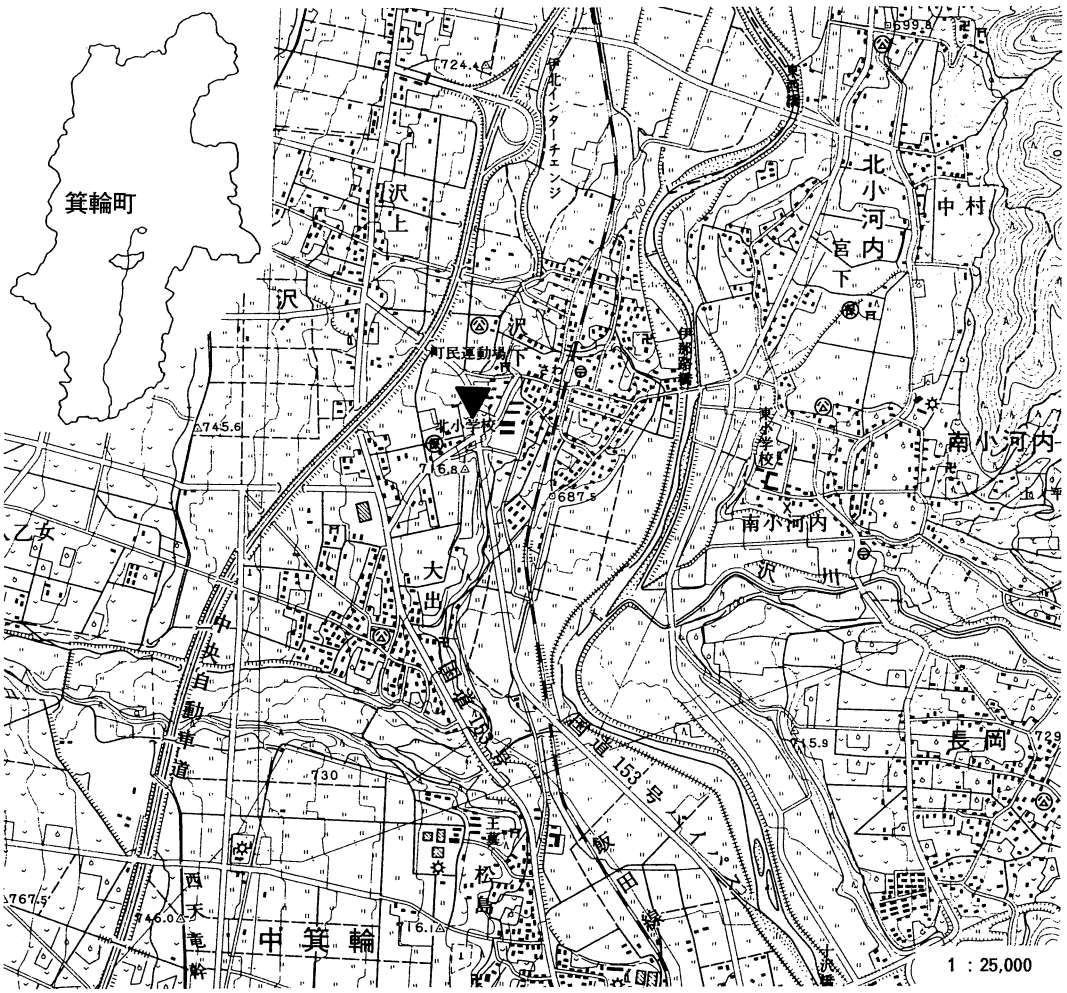
図版１　遺跡地遠景（東方より）、調査地近景（南西より）
図版２　調査地全景、土層断面
図版３　２１号住居址、２１号住居址遺物出土状況１
図版４　２１号住居址遺物出土状況２
図版５　２１号住居址遺物出土状況３
図版６　２２号住居址、２２号住居址炉、遺物出土状況
図版７　２１号住居址出土土器１
図版８　２１号住居址出土土器２
図版９　２２号住居址出土土器
図版10　出土石器１、出土石器２
図版11　出土石器３、出土石器４
図版12　出土石器５、出土石器６

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

昭和48年より進めてられてきた国道153号線箕輪バイパス建設事業は、全体計画6,795ｍのうち、平成元年３月に起点となる木下南部から大出までの4,480ｍがまず共用を開始し、今年度末には大出以北の工事が完了し、バイパス全線が開通する運びとなった。

町教育委員会は本事業に伴い、昭和55から57年度の３ヶ年に渡って町南部に位置する箕輪遺跡の記録保存事業を行ってきた。また平成元年度には、丸山遺跡の第１次調査と熊の上遺跡の



第１図　位置図

同事業を実施し、縄文時代中期中・後葉の集落址が確認され、多大な成果を収めている。しかし、丸山遺跡については、1次調査の際に用地の取得されなかった125㎡が、未調査となっていた。そして、平成4年度中に長野県伊那建設事務所と町教育委員会との間で協議が持たれ、発掘調査の再開について一応の合意が得られた。翌平成5年7月、両機関の間で改めて発掘調査の委託契約が結ばれた。そして、町教育委員会が新たに調査団を結成し、同年8月20日から10月12日までを期間として本遺跡の第2次調査を実施した。調査終了後、直ちに整理作業を開始し、平成6年3月をもって報告書の刊行に至った。

尚、調査地点は、上伊那郡箕輪町大字中箕輪1,098番地の1他で、北緯35° 55′ 54″、東経137° 59′ 07″、標高713～715mに位置する。

第2節　調査組織の編成

調査主体・事務局

箕輪町教育委員会	教　育　長	堀口　　泉
	社会教育課長	大槻丞司
	主　　幹	柴　　登巳夫（箕輪町郷土博物館主任学芸員）
	副　主　幹	青木　　正（箕輪町郷土博物館学芸員）
	主　　査	赤松　　茂（箕輪町郷土博物館学芸員）
	臨時職員	酒井峰子
	臨時職員	根橋とし子
	臨時職員	宮脇陽子

調査団

調査団長	樋口彦雄
調査主任	赤松　　茂
調査員	福沢幸一
調査員	根橋とし子
調査員	宮脇陽子
調査団員	井上武雄、大槻泰人、岡　　章、岡　　正、春日義人、倉田千明、小池久人、小嶋久雄、後籐主計、笹川正秋、野村金吉、伯耆原　正、堀　五百治、堀　美人、松田貫一、松田幸雄、水田重男、向山幸次郎、矢島祥亮、山口昭平、山田武志、根橋由紀、西出あゆみ、唐沢房恵、三浦幸子、百瀬千里、百瀬美晴

第3節　調査日誌

8月20日（金）　曇　　重機による表土剥ぎを行った。

8月23日（月）　晴　　作業道具の運搬を行った。

8月24日（火）　晴　　東側から西方へと遺構上面確認を行った。縄文土器片や石鏃が出土した。

8月25日（水）　晴　　上面確認を引き続き行った。また、サブトレンチA・Bを開けた。

8月26日（木）　曇　　上面確認を行った。縄文時代の住居址が1軒検出された。また、ベンチマークの移動を行った。

8月27日（金）　雨　　室内作業

8月30日（月）　晴　　上面確認を行った。

8月31日（火）　晴　　上面確認を行った。第1次調査時に確認された8号住居址を含め、住居址は5軒（8、21、22号住居址と命名）を検出した。

9月1日（水）　晴　　22号住居址にベルトを設定し、掘り下げを行った。22号住居址からは、石組み炉を検出した。

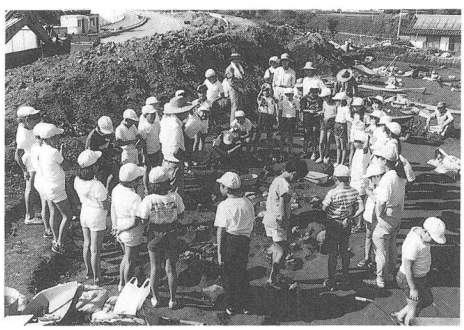
9月2日（木）　曇　　22号住居址の掘り下げを行い、ベルトの土層断面測量を行った。21号住居址内にトレンチを入れ、北壁の土層断面測量を行った。みのわ新聞・箕輪毎日新聞が取材に、町会議員が見学に来た。

9月3日（金）　雨　　室内作業

9月6日（月）　曇　　22号住居址の土層断面測量と各住居址の掘り下げを行った。箕輪北小学校長が見学に来た。

9月7～9日（火～木）雨　　室内作業

9月10日（金）　曇　　各住居址の柱穴の半割りと22号住居址の周溝の掘削と、21号住居址の土器の精査を行った。



9月13・14日（月・火）雨　　室内作業

9月16日（木）　晴　　22号住居址の柱穴の掘削を行った。また、箕輪北小学校の生徒が見学に来た。

9月17日（金）　曇　22号住居址の柱穴の断面測量と掘削を行った。

9月20日（月）　晴　住居址の平面測量と炉と柱穴の半割りと土層断面測量を行った。

9月21日（火）　曇　住居址の周溝の掘削を行った。また、21号住居址の全体写真を撮る準備を行った。教育長が見学に来た。

9月22日（水）　雨　室内作業

9月24日（金）　曇　21号住居址にメッシュを切り遺物の平面測量を始めた。

9月27日（月）　晴　21号住居址の遺物の平面測量を行った。また、22号住居址の掘削も行った。

9月28日（火）　晴　22号住居址の写真撮影をし、その後炉の平面測量を行った。21号住居址の平面測量を行った。また、21号住居址の遺物を取り上げた。

9月29日（水）　曇　21号住居址の遺物の取り上げを行った。22号住居址の平面測量を始めた。

9月30日（木）　雨　室内作業

10月1日（金）　晴　22号住居址の平面測量を行った。8号住居址の土器の平面測量を行った。また、21号住居址の炉の土層断面測量を行った。

10月4日（月）　晴　21・22号住居址の平面測量を行った。

10月5日（火）　曇　8・22号住居址の平面測量を行った。調査区全体の写真も撮った。

10月6日（水）　曇　22号住居址の炉の土器の取り上げと、21号住居址の測量ポイント、グリッドを平面図に落とした。

10月7日（木）　曇　22号住居址の炉の掘り方の平面測量と調査区の全体測量を行った。

10月8日（金）　雨　室内作業

10月11日（火）　晴　調査区北壁の壁削りを行い、土層断面測量を行った。午後、道具の片付けを行った。

10月12日（水）　曇　北壁断面の土層注記を行い、調査の全てを終了した。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

箕輪町は、西は木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曽山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帯無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。

丸山遺跡は、この河岸段丘の突端部にそって帯状に連なる遺跡群の一つであり、上記のとおり恵まれた自然環境の中に存在しているといえよう。

上空より遺跡地を望む

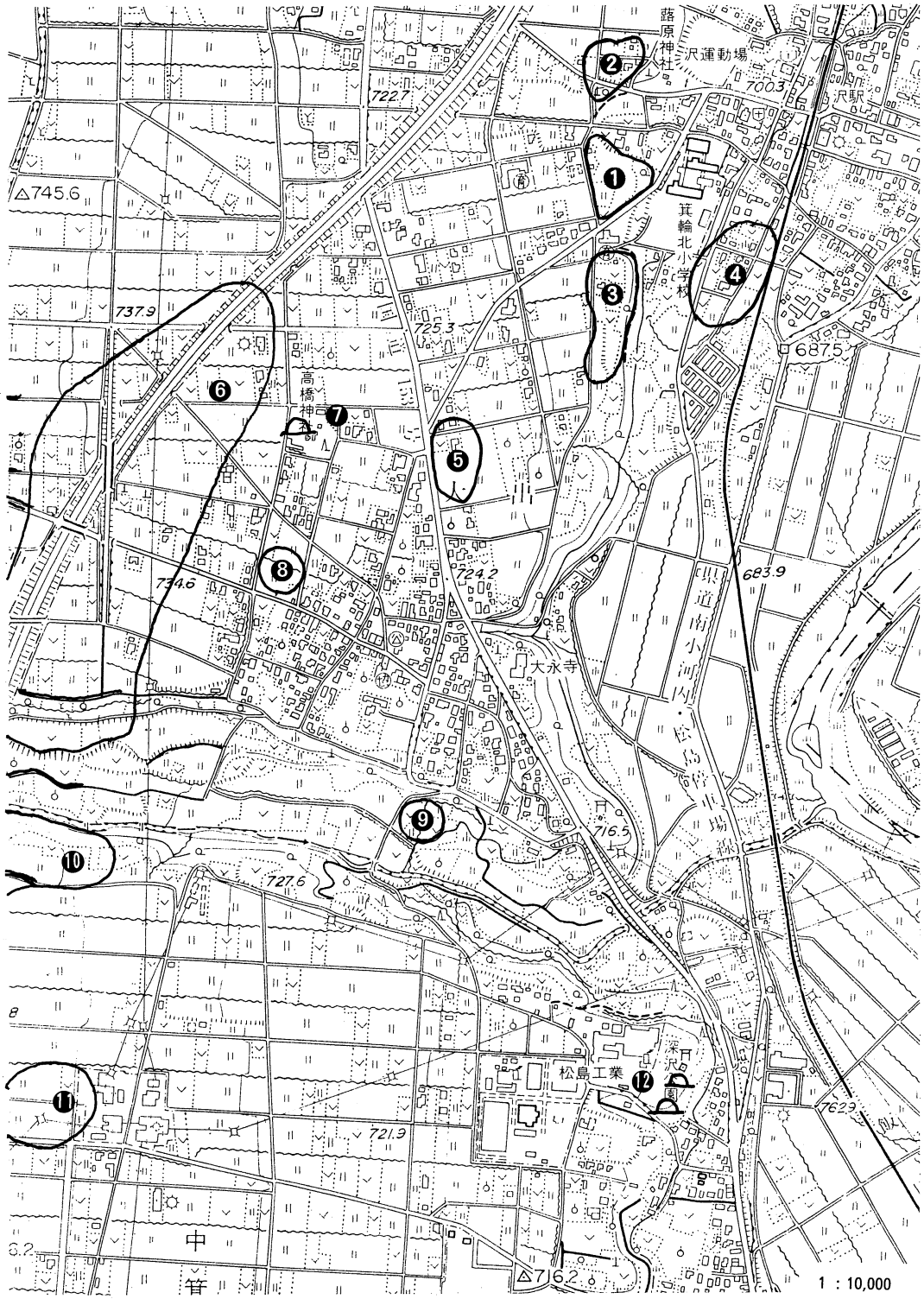
第2節　歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176ヶ所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡（１～８）と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在する遺跡の２つに大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・平安の各時代の集落址の一端を探ることができた。また、段丘崖下には古代水田址である広大な箕輪遺跡が広がる。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	
1	丸山	沢	段丘		○					平成元年、第1次発掘調査実施
2	蕗原神社上	沢	段丘		○					
3	古城	沢	段丘		○			○	○	平成元年、熊野上遺跡として発掘調査実施
4	熊野	沢	段丘		○					
5	稲荷山	大出	段丘					○		
6	中道	大出	扇央		○		○	○	○	昭和48年、県教委にて発掘調査実施。昭和63年発掘調査実施。
7	大天塚古墳	大出	扇央				○			
8	かんぜん	大出	扇央					○		
9	大出	大出	扇央		○			○		
10	堂地	松島	扇央		○	○		○		昭和48年、県教委にて発掘調査実施。昭和63年発掘調査実施。
11	大道上	松島	扇央					○		
12	松島王墓古墳	松島	段丘				○			



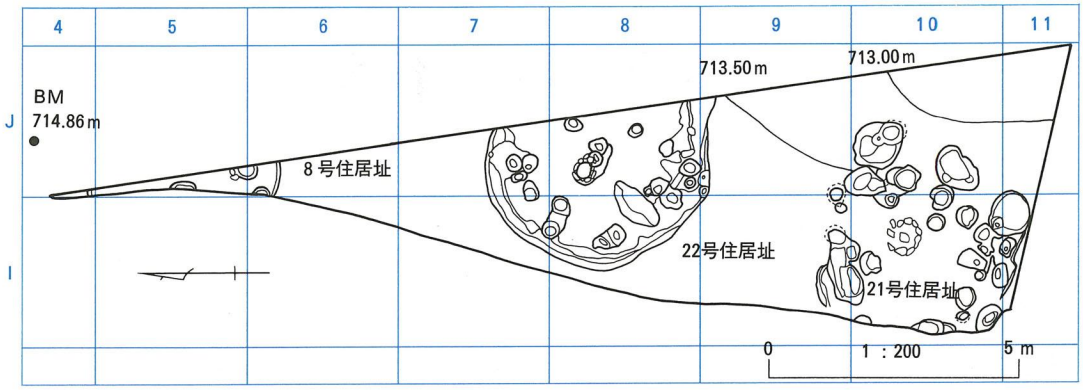
第２図　周辺遺跡分布図（昭和52年現在）

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　調査方法と結果概要

今回の調査は、前回行った第１次調査箇所に隣接しかつ遺跡の東端部に位置することから、調査面積およそ125㎡の全域を対象とし、調査を実施した。第１次調査では、畑地として土地利用されていた現地が、かつて水田であったことが確認できており、全体的に削平され、また部分的に著しい撹乱を受けている可能性を予測していた。しかし、地下遺構の保存状況は部分的な撹乱や遺構上部の削平など破壊は受けているものの、比較的明瞭に遺構の確認が行えた前回の例に習い、地形の傾斜を考慮して大型重機によるトレンチ掘り、そして表土の除去作業を調査の手始めとした。尚、調査箇所の東側に隣接する第３次調査箇所と、一部調査を並行して実施した。これはあくまでも作業の進行上、効率的かつより正確な遺構の検出や記録が行えることを目的としたためである。

第３図　調査範囲図



第4図　全体図

作業は表土除去の後、手作業により遺構の上面確認、遺構内の掘削、平面及び断面の測量・写真撮影等の記録、の手順で行い、検出した遺構は前回の遺構番号に継続して呼称した。またグリッドも調査中に任意に設定したが、終了後整理作業時において第1次調査グリッドへ修正している。標高は、調査地の北西部にあるベンチマーク（714.86m）を使用した。検出遺構の概要は次のとおりである。

・竪穴式住居址3軒（縄文時代）

第2節　土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→テフラ層（ローム層）→砂岩・粘板岩を主とする砂礫層という堆積状況が普遍的にみられ、遺構の構築はテフラ層にまで及ぶものが多い。

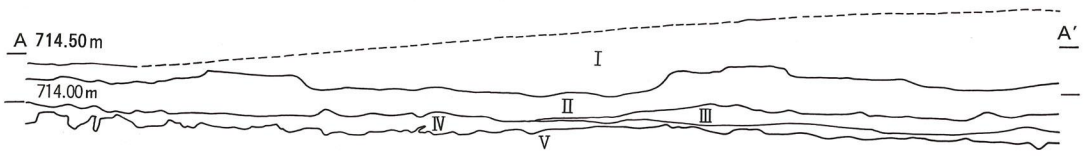
Ⅰ層－黒褐色土層（10ＹＲ２／３）耕作土。粘性弱 、締まり強。

Ⅱ層－鈍い赤褐色土層（2.5ＹＲ５／４）撹乱層。３～５㎝大の礫を５％含む。粘性弱、締まり強。

Ⅲ層－黒褐色土層（10ＹＲ２／２）水田土。本層下部に酸化鉄の沈澱が確認される。粘性中、締まり強。

Ⅳ層－暗褐色土層（10ＹＲ３／３）遺構確認層。粘性中、締まり強。

Ⅴ層－黄褐色土層（10ＹＲ５／６）テフラ層。粘性中、締まり強。



第5図　土層堆積図

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　住居址

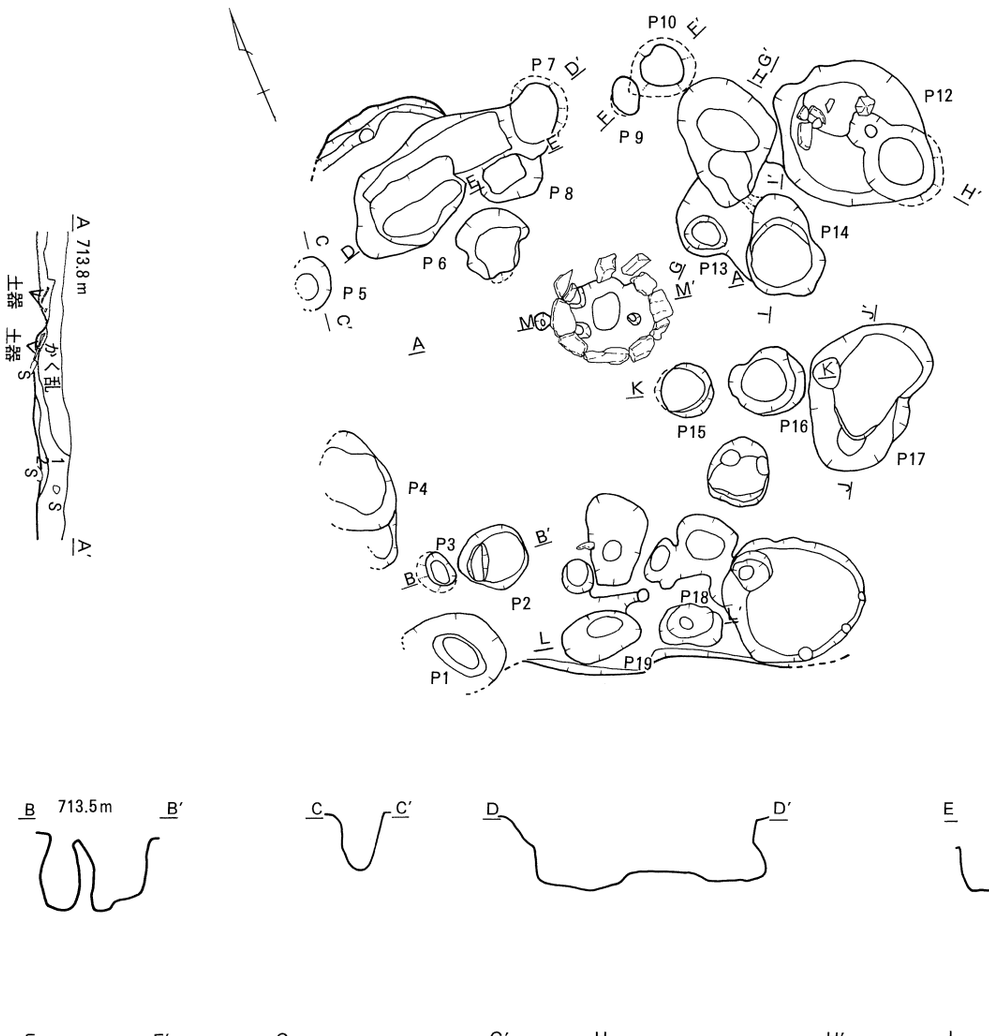
１，２１号住居址

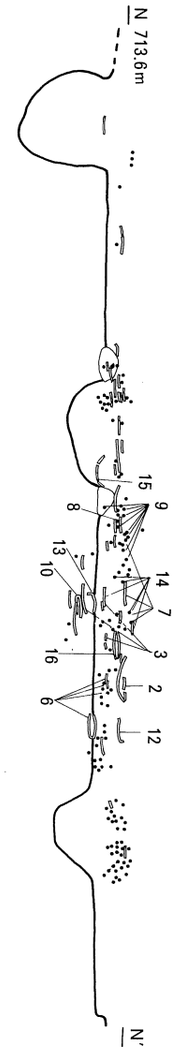
遺構（第６図）　調査区の南西部、Ｉ－10、Ｊ－10グリッドに位置する。検出した住居址は、掘削以前に既に上部の削平（東側は床面まで）と撹乱を受けており、部分的に壁の立ち上がりが残存するものの、プラン全体の形状及び大きさは確認できなかった。しかし、本住居址に属すると考えられるピットの検出範囲と同時期にあたる住居址の検出例から考えて、おおよそ直径５．４ｍ前後の円形を呈するプランと思われる。主軸は、炉の位置とその周囲の床の範囲から推測すると、N-20°-Wを中心としたプラスマイナス10°前後の方向と思われる。壁高は、５～25cmを測り、残存する北壁のみに限り壁溝らしき凹みが確認できたものの、他からはその痕跡は認められなかった。床の状態は、炉の周囲が堅く叩き締められているが、壁に近いピット周辺部は比較的軟弱であった。

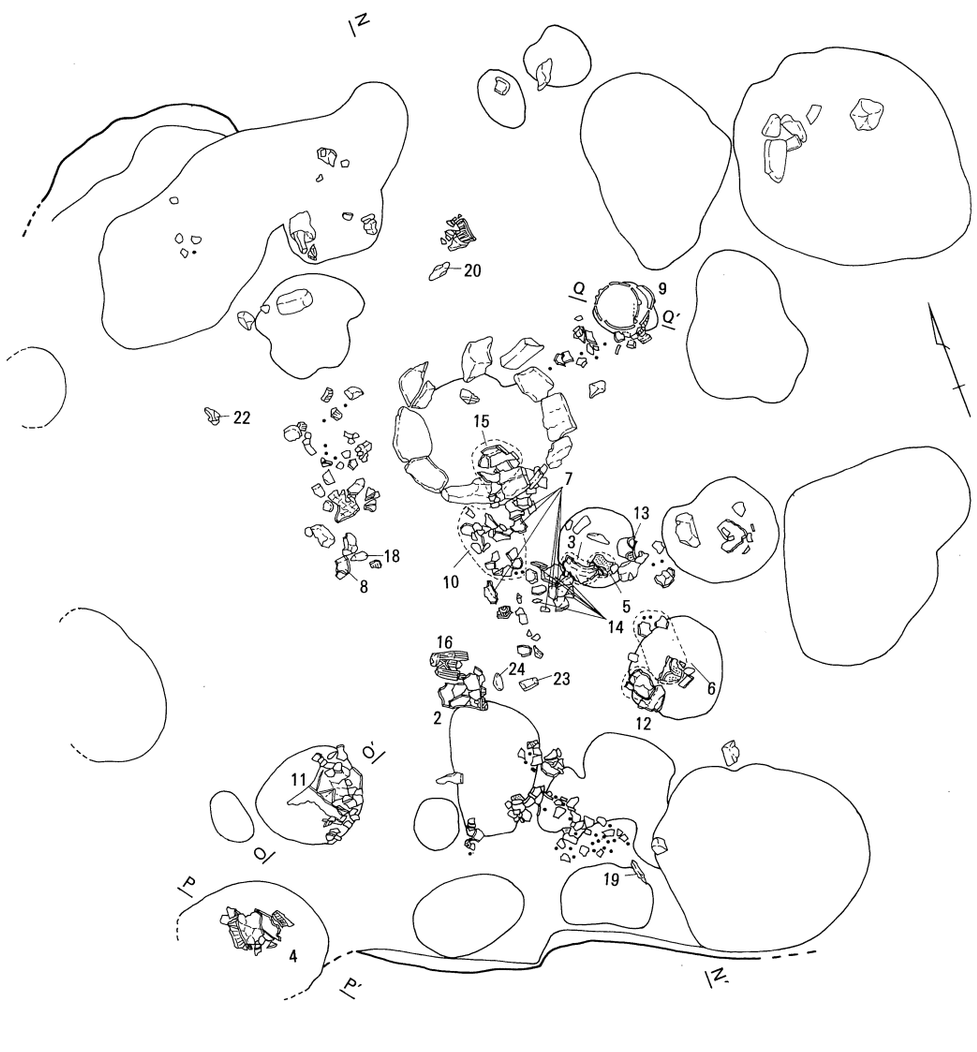
覆土は、２分層された。１層はローム粒子・炭化物をまばらに含む暗褐色土（10ＹＲ３／３）。２層は土器を多量に、炭化物をまばらに含む黒褐色土（10ＹＲ２／２）。

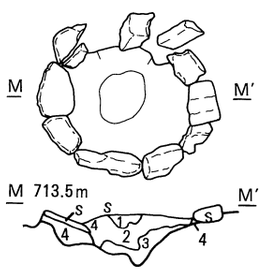
ピットは19穴検出し、形状・大きさ・深さ・断面にみられる掘り込み状況により、柱穴及び土坑に種別できる。柱穴になるものとして、Ｐ5・8・12・17・18・19の６穴が想定され、内Ｐ12とＰ17の２穴については土坑との切り合いによる重複関係にある。土坑は、包含する遺物の諸特徴から、本住居址との明確な時期差は確認できなかったため、付属施設として取り扱う。土坑の中には、壁の内側をえぐり掘った袋状土坑（Ｐ3・7・10・11・12・15）が含まれる。ピットの法量は次のとおりである（凡例-長軸×短軸×深さ）。Ｐ1-80×（）×78cm、Ｐ2-60×54×61cm、Ｐ3-31×24×64cm、Ｐ4-120×（）×53cm、Ｐ5-40×（）×51cm、Ｐ6-100×60×64cm、Ｐ7-54×44×53cm、Ｐ8-56×34×46cm、Ｐ9-30×22×39cm、Ｐ10-34×30×56cm、Ｐ11-110×80×76cm、Ｐ12-190×120×60cm、Ｐ13-36×34×30cm、Ｐ14-80×64×60cm、Ｐ15-44×44×50cm、Ｐ16-62×58×66cm、Ｐ17-128×104×56cm、Ｐ18-42×30×45cm、Ｐ19-62×40×50cm。

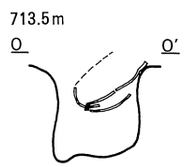
炉は、本住居址のほぼ中央に位置する石囲炉である。104×92cmの規模で楕円形を呈し、32cmの深さを測り、すり鉢状に掘り込まれる。底面及び壁面は軟弱で、過度の火焼状況は認められなっかた。覆土は４分層され、１層はローム粒子・炭化物をまばらに含む黒褐色土（10ＹＲ２／２）。２層は焼土・炭化物をまばらに含む黒褐色土（10ＹＲ２／３）。３層は炭化物をまばらに含む暗褐色土（10ＹＲ３／４）。４層は炭化物・焼土まばらに含む暗褐色土（10ＹＲ３／４）。

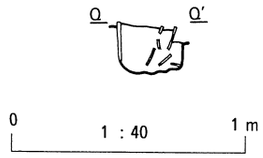




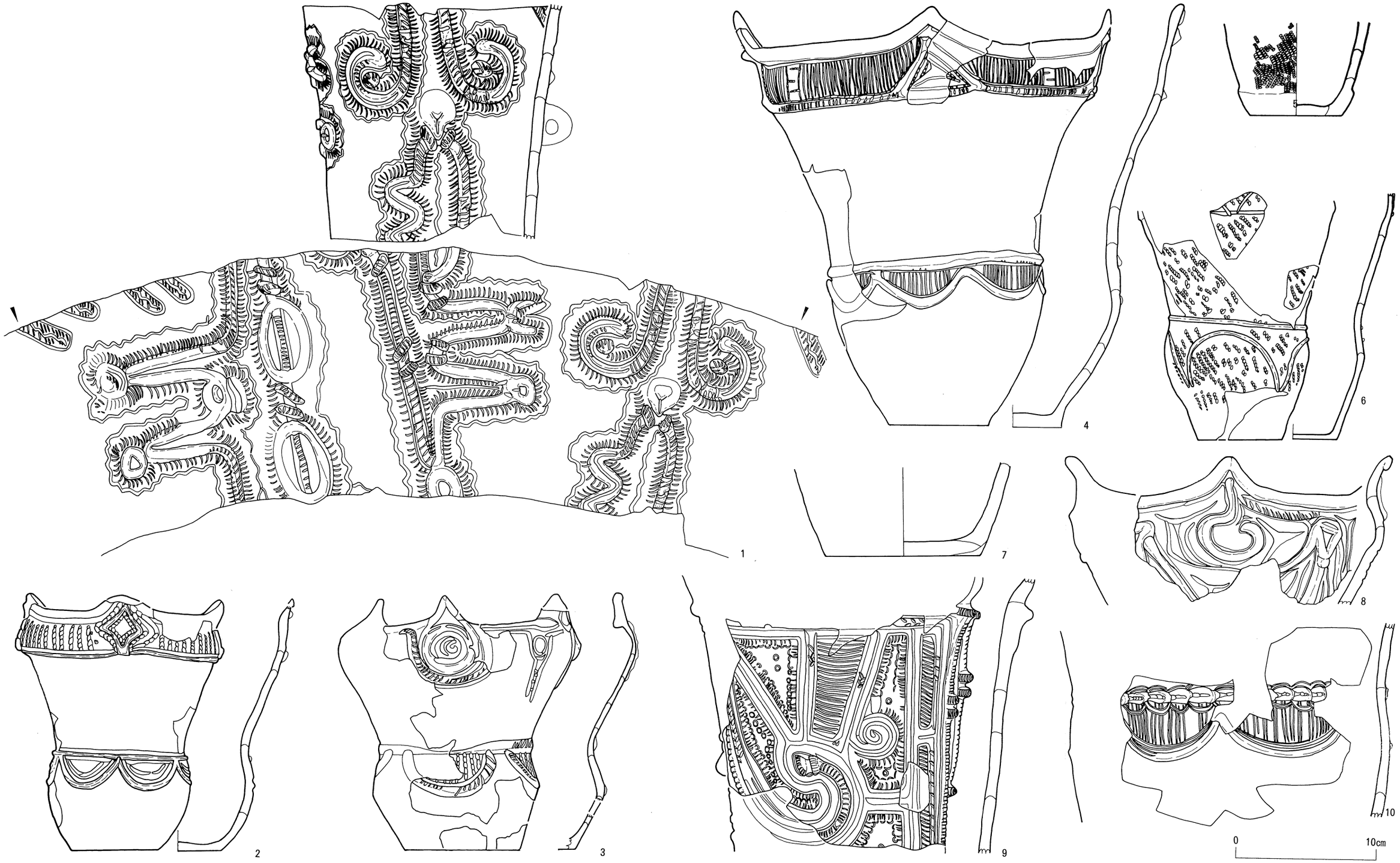




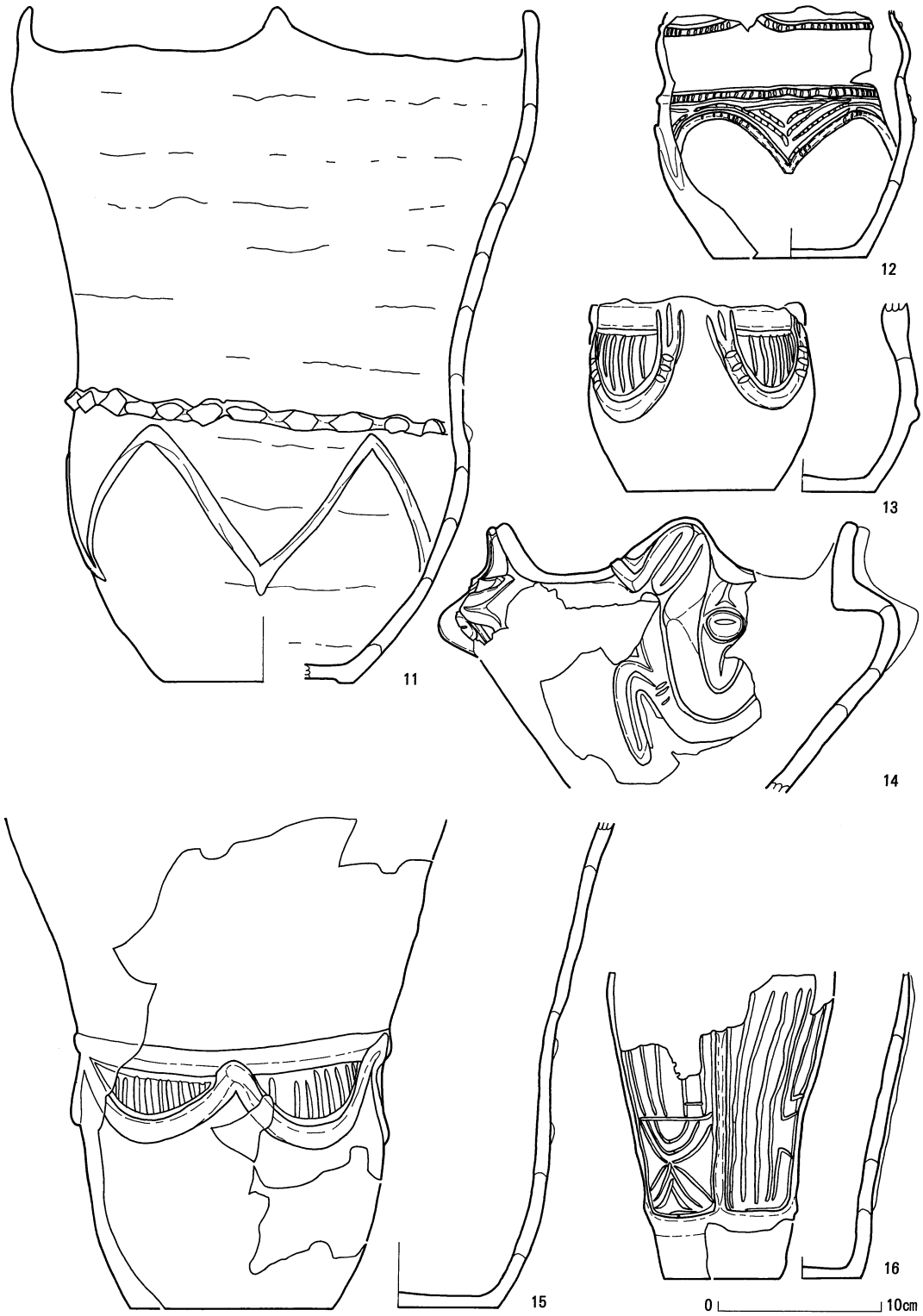




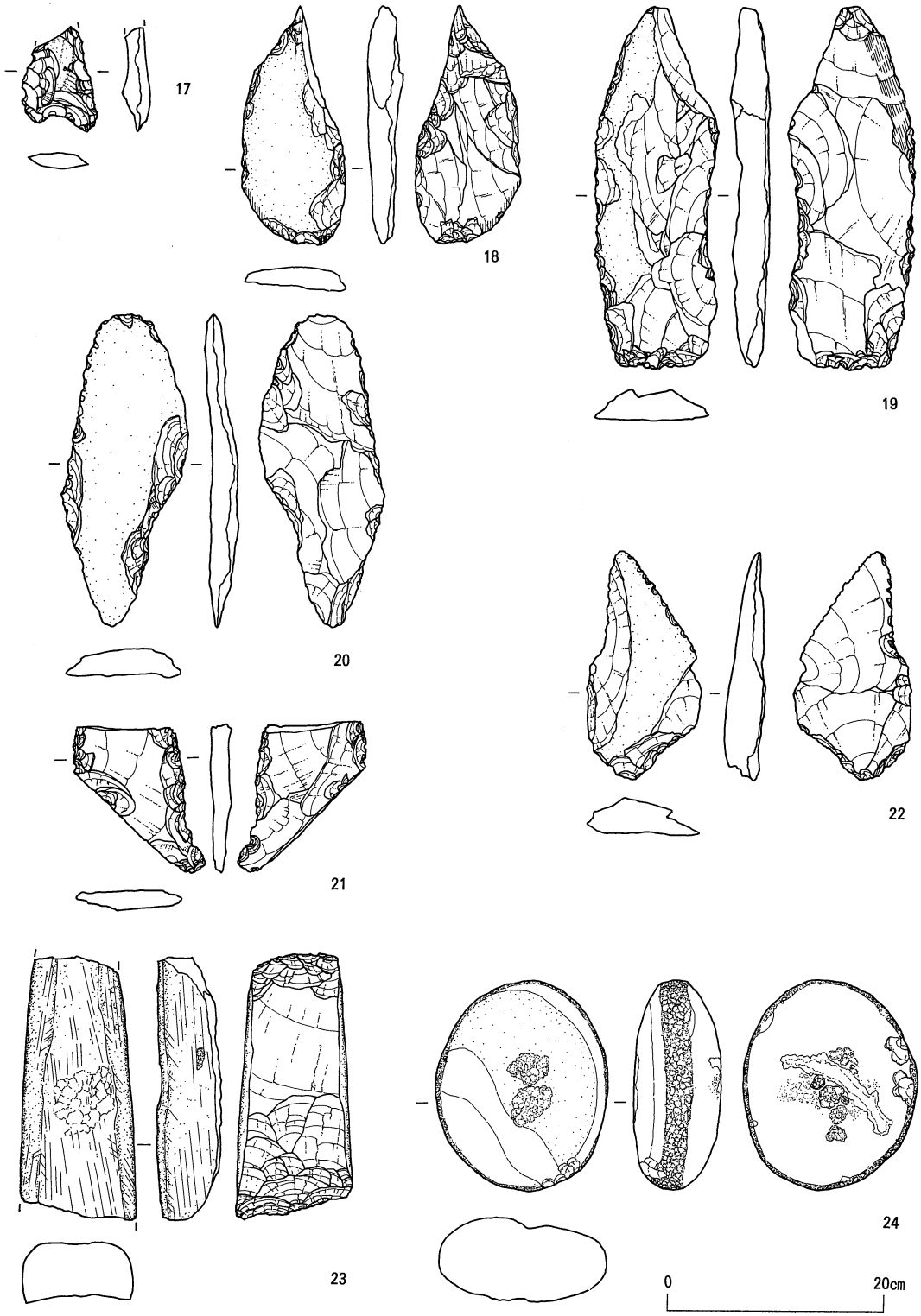
第６図　２１号住居址実測図・遺物出土状況図



第７図　２１号住居址出土土器実測図　１



第８図　２１号住居址出土土器実測図　２



第９図　２１号住居址出土石器実測図

遺物（第６～９図）　土器（１～16）及び石器（17～24）が出土している。遺物は、炉を中心とした一帯に床直ないし床上10㎝以内の高さから、集中した出土の仕方をしている（第６図）。土器は、器形が判別でき復元可能な個体がほぼ一ケ所まとまりを見せている。その中でも、Ｐ１とＰ11内部に埋没する物や、１と９のように共に別個体の土器が重ねられ、かつ埋甕状に埋設された特異な出土も認められる。器形は、胴中位より過半部が下膨れをし、内湾気味（３、14）もしくは大きく外反（２、４）する波状口縁を呈するタイプが主である。文様は、隆帯と沈線の組み合わせによる楕形文（２～４、10、13、15）・懸垂文（６、11、12）が主流を占める。また埋設土器１は、波状沈線文区画で隆帯文・爪形文による躍動する形象文が描かれ、９は、隆線・沈線によって枠組された沈線文・爪形文・円形印刻文で装飾される。

石器は、石鏃（17）、打製石斧（18～20）、使用痕のある剥片石器（21・22）、磨製石斧（23）、磨・凹・敲石（24）が出土している。

尚、本住居址の時期は、出土土器の形式的差異に若干疑問点が生じるが、縄文時代中期中葉もやや後半に位置づけられよう。

第２表　２１号住居址出土石器観察表

（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
			(㎝)	(g)		
17	石　鏃	黒曜石	(1.6) 2.4 0.6	(1.1)	・凹基無茎石鏃。 ・両面調整であるが、やや粗雑な作出である。	先端部欠損
18	打製石斧	輝緑凝灰岩	(11.0) 4.8 1.6	70.0	・撥形に属する中型品で、基部両側面に磨痕が認められる。	上部欠損
19	打製石斧	粘板岩	16.8 5.7 1.7	168.0	・短冊型に属する中・大型品で、基部は直刃に作出される。	
20	打製石斧	砂　岩	14.4 5.4 1.3	98.5	・側縁部に抉りが入る。分銅か。	
21	剥片石器	粘板岩	(6.8) (5.0) (9.0)	28.0	・両側縁が刃部として使用。	
22	剥片石器	頁　岩	10.6 5.4 1.8	74.0	・剥片の一両側縁を刃部として使用し、片面に細かな剥離（使用痕）が認められる。	
23	磨製石斧	緑泥岩	(12.1) (5.3) 3.0	337.0	・乳棒状磨製石斧。基部・頂部共、過度の使用による後退が認められる。	裏面は欠損
24	磨・凹敲石	両雲母花崗岩	9.1 7.9 4.0	405.0	・表・裏面に磨痕・凹痕が、側縁部には敲打による磨滅が認められる。	

2，２２号住居址

遺構（第10図）　調査区の西部ほぼ中央、Ｉ－８・９、Ｊ－８・９グリッドに位置する。21号住居址同様、上部が削平及び撹乱を受け、住居址の東部壁の立ち上がりが僅かに確認できた。規模は、6.7×5.8mで円形ないし楕円形を呈するプランである。主軸は、炉の位置と周囲の床の範囲から、N-54°-Wを示す。壁高は、最も立ち上がりが残る北西部で23cmを測る。壁溝は、奥壁下に掘り凹められ、半周するのみである。床の状態は、炉の周辺部が最も堅く叩き締められ、地形に沿って緩やかに南東方向に傾斜する。また、炉の脇に著しい火焼状況を示す痕跡が確認され、各箇所で炭化物や焼土のブロックが床直上で出土していた。

覆土は、７分層された。１層は炭化物を多く、ローム粒子をまばらに含むオリーブ褐色土（2.5ＹＲ４／３）。２層は炭化物を多く含む黒褐色土（2.5ＹＲ３／１）。３層は炭化物をまばらに含む黒オリーブ褐色土（2.5ＹＲ３／３）。４層は炭化物をまばらに、ローム粒子を多く含む黒オリーブ褐色土（2.5ＹＲ３／３）。５層は炭化物をまばらに含む黄褐色土（2.5ＹＲ５／４）。６層は炭化物をまばらに、ローム粒子を多く含むオリーブ褐色土（2.5ＹＲ４／３）。７層は炭化物・ローム粒子をまばらに含むオリーブ褐色土（2.5ＹＲ４／４）。

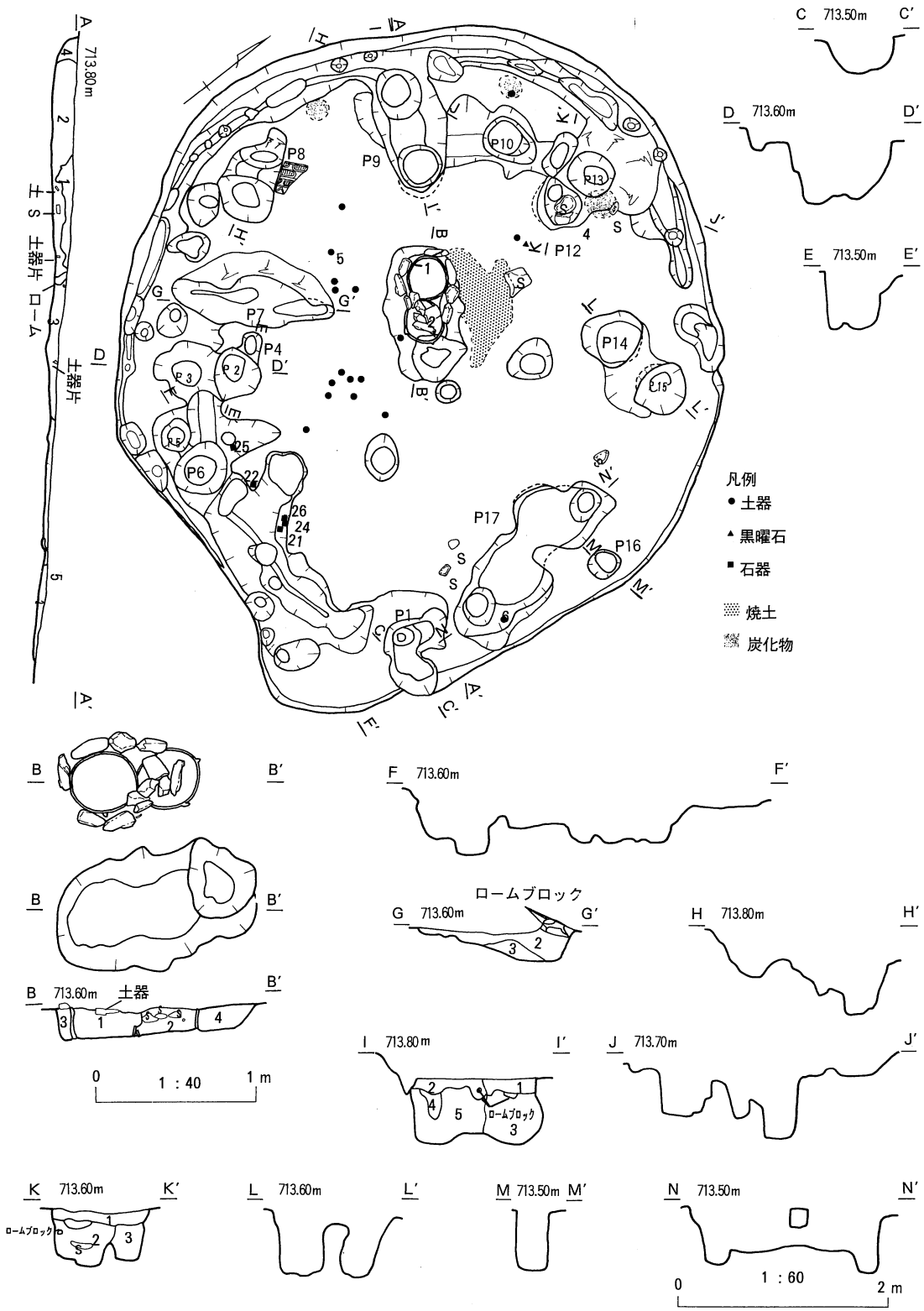
ピットは19穴検出し、柱穴としてはＰ7を除く18穴が想定される。特徴としては、Ｐ2とＰ3、Ｐ9とＰ10、Ｐ12とＰ13、Ｐ14とＰ15、Ｐ17とＰ16に見られるように、炉を中心として各２穴づつが放射状に隣接し配置する。これは、本住居址が拡張工事に伴って、柱の移動を行ったことを意味するものであろうか。法量は次のとおりである。Ｐ1-78×68×37cm、Ｐ2-50×42×73cm、Ｐ3-60×49×56cm、Ｐ4-19×18×122cm、Ｐ5-30×25×50cm、Ｐ6-56×48×57cm、Ｐ7-145×48×57cm、Ｐ8-214×44×61cm、Ｐ9-70×70×61cm、Ｐ10-50×70×60cm、Ｐ11-50×50×46cm、Ｐ12-44×44×52cm、Ｐ13-74×40×61cm、Ｐ14-60×50×65cm、Ｐ15-62×42×67cm、Ｐ16-32×28×58cm、Ｐ17-110×76×56cm、Ｐ18-80×70×55cm。

炉は、石囲みによる埋甕炉と、囲みのない埋甕炉が２基存在する。２基はお互い接触し、炉ｂが炉ａによって破壊を受け、接触する土器の一部が欠損し、転石の敷設も炉ｂを切る形で行われる。柱の移動による床面積の拡張に合わせ、炉ｂの廃棄後炉ａの新設を行ったものであろう。

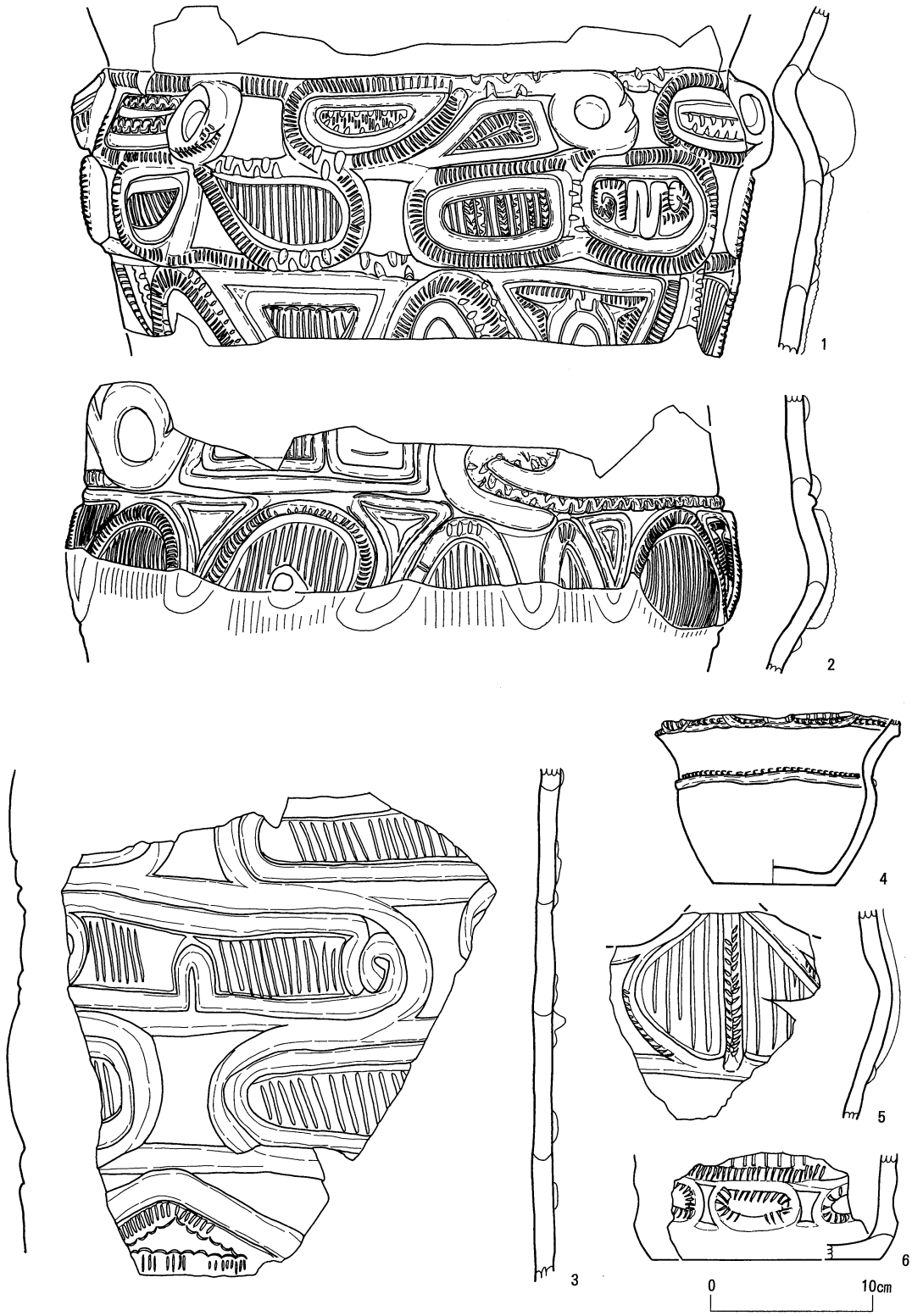
覆土は４分層される。１層はローム粒子を多く、炭化物をまばらに含む暗褐色土（10ＹＲ３／３）。２層はローム粒子をまばらに含む暗褐色土（10ＹＲ３／４）。３層はにぶい赤褐色土（2.5ＹＲ５／４）。４層は炭化物をまばらに含む明赤褐色土（５ＹＲ５／６）。

遺物（第11～13図）　土器（１～６、８～18）、石器（19～26）、土偶（７）が出土している。土器は、床直上（３・５）ないし炉（１・２）、ピット内（４・６）から出土しているが、点数は少ない。土器の特徴から、縄文時代中期中葉に位置づけられよう。

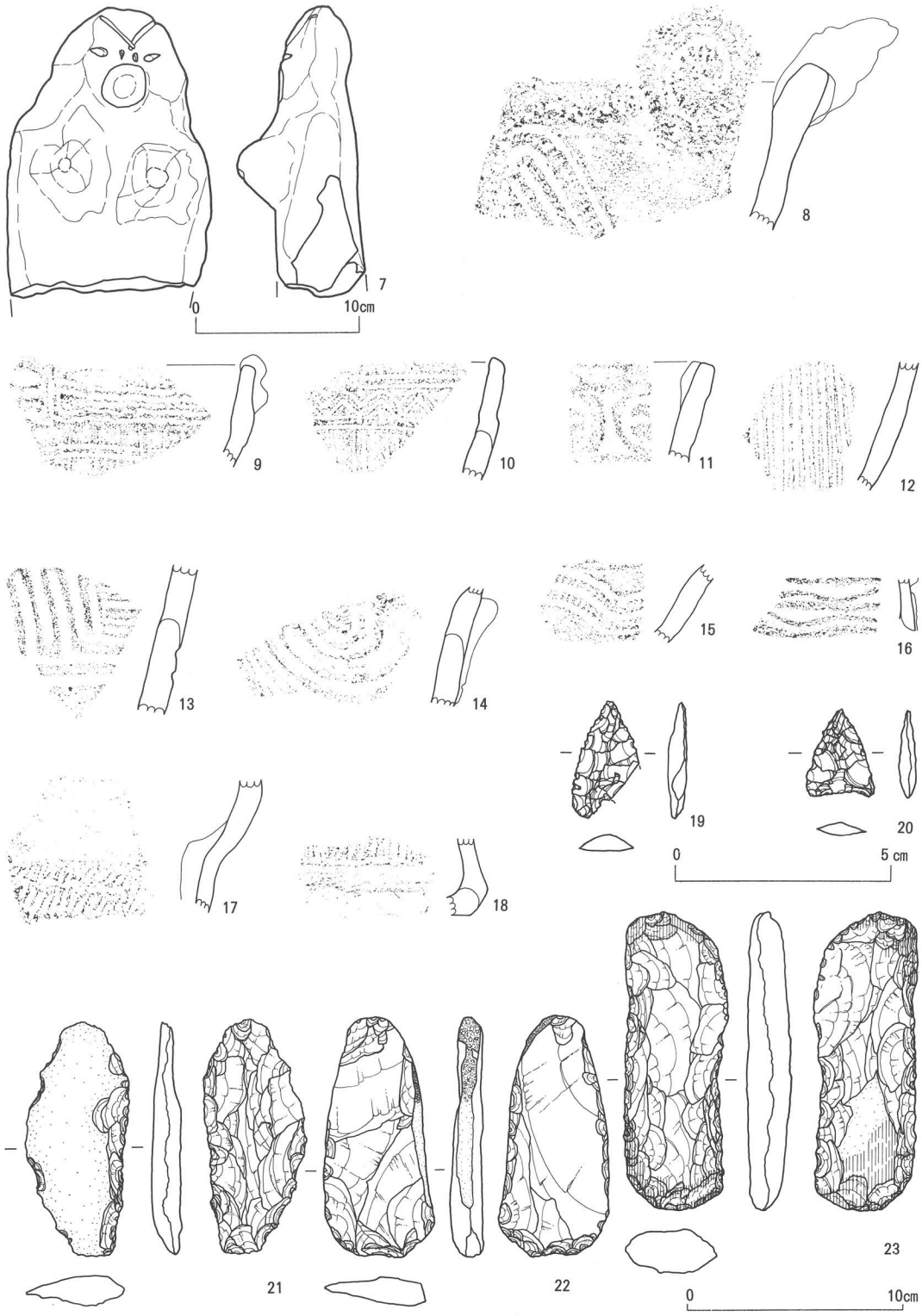
石器は、石鏃（19・20）、打製石斧（21～23）、石匙（24）、磨製石斧（25・26）が出土している。



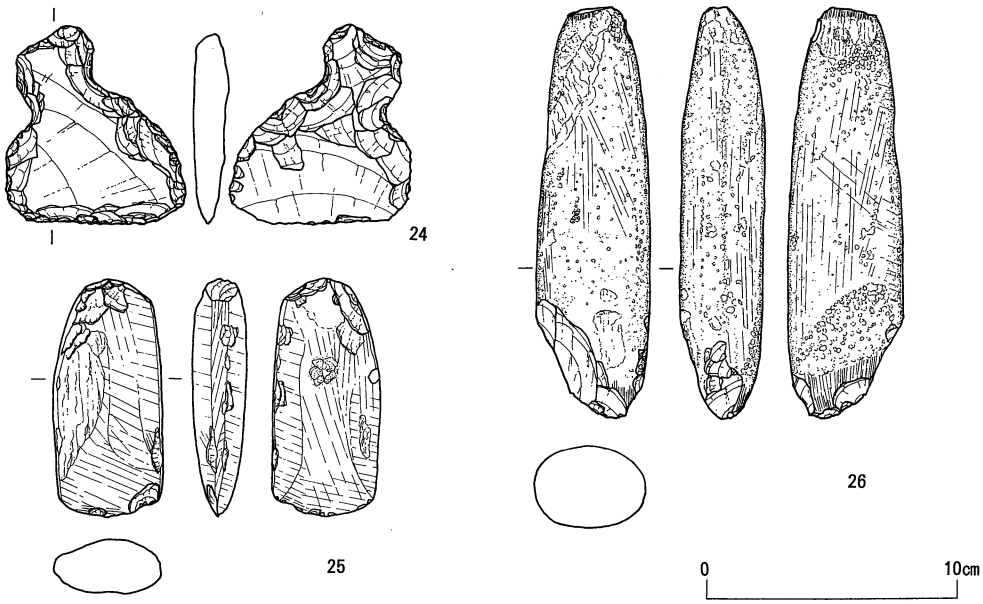
第１０図　２２号住居址実測図



第１１図　２２号住居址出土土器実測図



第１２図　２２号住居址出土製品・石器実測図、土器拓影図



第１３図　２２号住居址出土石器実測図

第３表　２２号住居址出土石器観察表

（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
19	石　鏃	黒曜石	(cm) 2.7 (1.4) 0.4	(g) (1.6)	・凹基無茎石鏃。 ・片脚部欠損。	
20	石　鏃	黒曜石	2.0 1.6 0.4	0.8	・平基無茎石鏃。	
21	打製石斧	頁　岩	10.8 4.6 1.8	63.0	・片面自然面残す。 ・基・頂部に刃部未確認。剥片石器か？	
22	打製石斧	緑泥片岩	11.1 5.0 1.5	99.0	・撥形に属する中型品。片側縁から頂部にかけて自然面を残す。	
23	打製石斧	頁　岩	13.8 4.7 2.1	168.0	・短冊型に属する中型品。頂・基部共、刃部として使用。刃部に磨滅が確認される。	
24	石　匙	砂　岩	7.9 7.2 1.4	75.0	・刃部は片側縁より調整。	
25	磨製石斧	硬砂岩	9.4 4.3 2.2	133.0	・定角式に属する中型品。 ・頂部は敲打による磨滅が認められる。	
26	磨製石斧	緑泥岩	16.5 4.5 3.3	395.0	・乳棒状に属する中型品。 ・全面に打痕と磨痕が認められる。 ・刃部は後退し、二部磨滅する。	

第Ⅴ章　まとめ

国道153号線・箕輪バイパス建設工事に係わる埋蔵文化財の記録保存事業（発掘調査）は、今回の丸山遺跡の第２次調査をもって終了した。

町教育委員会は同開発事業に伴い、昭和55年度から58年度にかけて、町南部に所在する箕輪遺跡の発掘調査を、そして平成元年度には丸山遺跡の第１次調査と熊野上遺跡（古城遺跡）の発掘調査を実施し、多大な成果を納めてきた。特に丸山遺跡の第１次調査では、1,880㎡の調査範囲より、縄文時代中期初頭から後葉、奈良・平安時代の竪穴式住居址17軒を検出した。中でも中・後葉の住居址からは豊富な遺物を伴出している。調査期間中は、町内外から多くの見学者が訪れ、ほぼ原形に近い形で出土した顔面把手付土器（第８号住居址）に大きな注目を集めた。しかし、本土器の部位が残ると予想される本住居址が完掘できないまま、今回の第２次調査を迎えるまで４年が経過した。

８号住居址の完掘もさることながら、今回の調査で最も着目される点は、予測される遺跡包蔵地の西部限界域に当たる箇所として、遺構の有無即ち集落域の限界を探ることと、各時期ごとにみられる集落構成の様子とその広がりなど、何らかの特徴を確認することである。そして既に確認済みの８号住居址の他、新たに中期中葉２軒の住居址（21・22号）を、更に本調査地西側に隣接した箇所で実施された第３次調査地においても、中期中葉の住居址３軒が検出している。それによると、河岸段丘の縁からわずか数メートルしか離れていない、かなりぎりぎりのところまで中期中葉の集落域が広がる。しかし、第１次調査で主体となった中期後葉期の住居址は今回はまったく検出されず、前回の調査結果がその限界ということがわかった。尚、各遺構出土遺物特に土器の分析により、各時期内での細分が可能と思われるが、総合的な結論については、後続して刊行する第３次調査報告書にて総括し、詳細な考察を行いたい。

末筆となりましたが、調査の進行及び本報告書作成にあたり、数々のご指導並びにご協力をいただきました各関係機関及び各個人の方々、また調査に携わっていただいた団員の皆様方に、この報告書の刊行を持ちまして厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献　（著者名50音順）

安孫子昭二　1988　「勝坂式系土器様式」　縄文土器大観　第2巻　中期Ⅰ

植田　真　1986　「組成論　勝坂式土器」　季刊考古学17　雄山閣

岡谷市教育委員会　1986　「梨久保遺跡」

神村　透　1986　「下伊那型櫛形文土器」　長野県考古学会誌51

末木　建　1988　「曾利式土器様式」　縄文土器大観　第3巻　中期Ⅱ

長野県史刊行会　1981　長野県史　考古資料編　全1巻（1）　遺跡地名表

長野県史刊行会　1985　長野県史　考古資料編　全1巻（3）　中・南信版

長野県史刊行会　1988　長野県史　考古資料編　全1巻（4）　遺構・遺物

藤森栄一他　1965　「井戸尻」　中央公論美術出版

三上徹也　1986　「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」　長野県考古学会誌51

三上徹也　1988　「唐草文系土器様式」　縄文土器大観　第3巻　中期Ⅱ

箕輪町誌編纂刊行委員会　1976　箕輪町誌　第1巻　自然・現代編

箕輪町誌編纂刊行委員会　1986　箕輪町誌　第2巻　歴史編

箕輪町教育委員会　1980　「箕輪遺跡　第1集」

箕輪町教育委員会　1981　「箕輪遺跡　第2集」

箕輪町教育委員会　1982　「箕輪遺跡　第3集」

箕輪町教育委員会　1983　「箕輪遺跡　第4集」

箕輪町教育委員会　1990　「丸山遺跡」

箕輪町教育委員会　1990　「熊の上遺跡」

図　　版

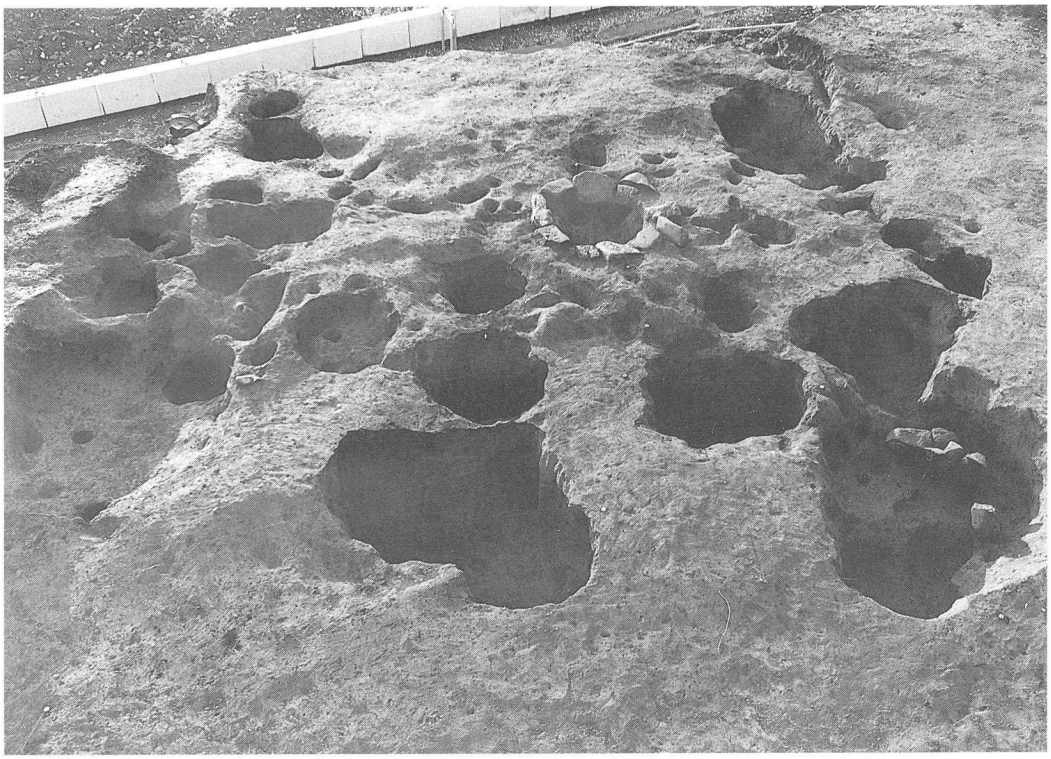
遺跡地遠景（東方より）

調査地近景（南西より）

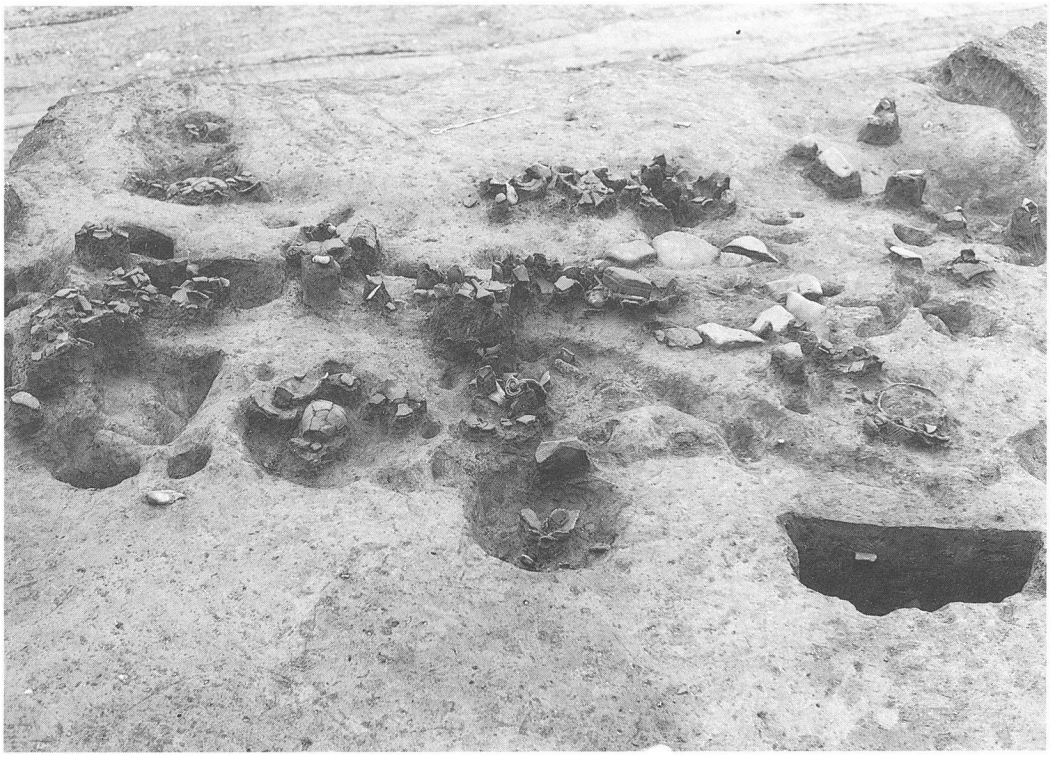
図版2

調査地全景

土層断面

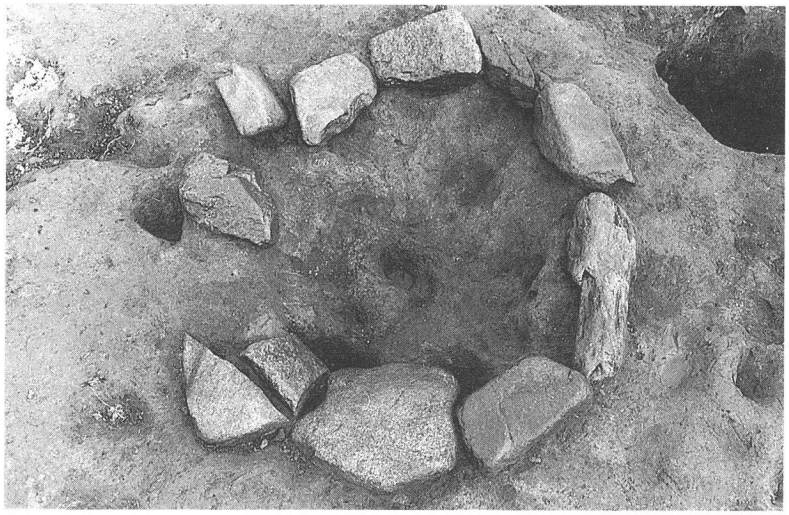


2 1号住居址

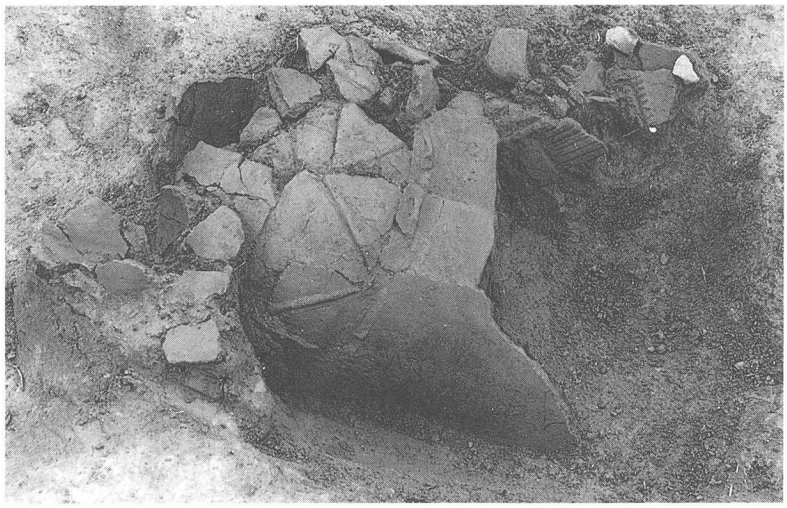


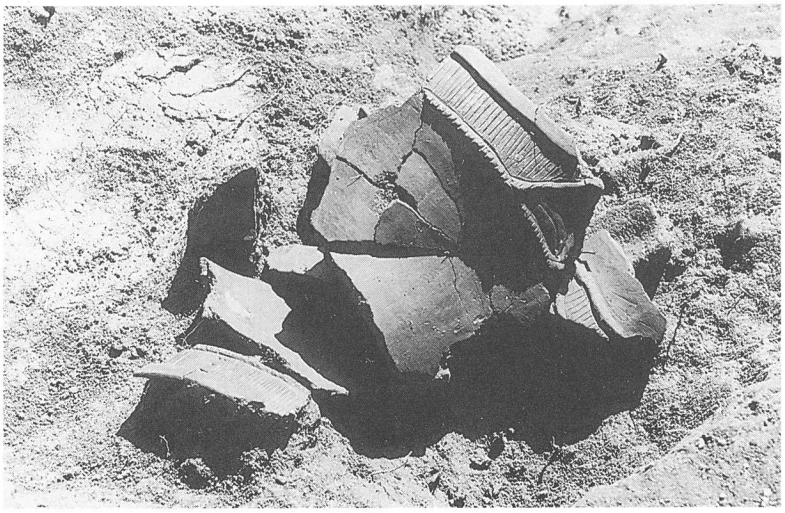
2 1号住居址 遺物出土状況 1

図版4



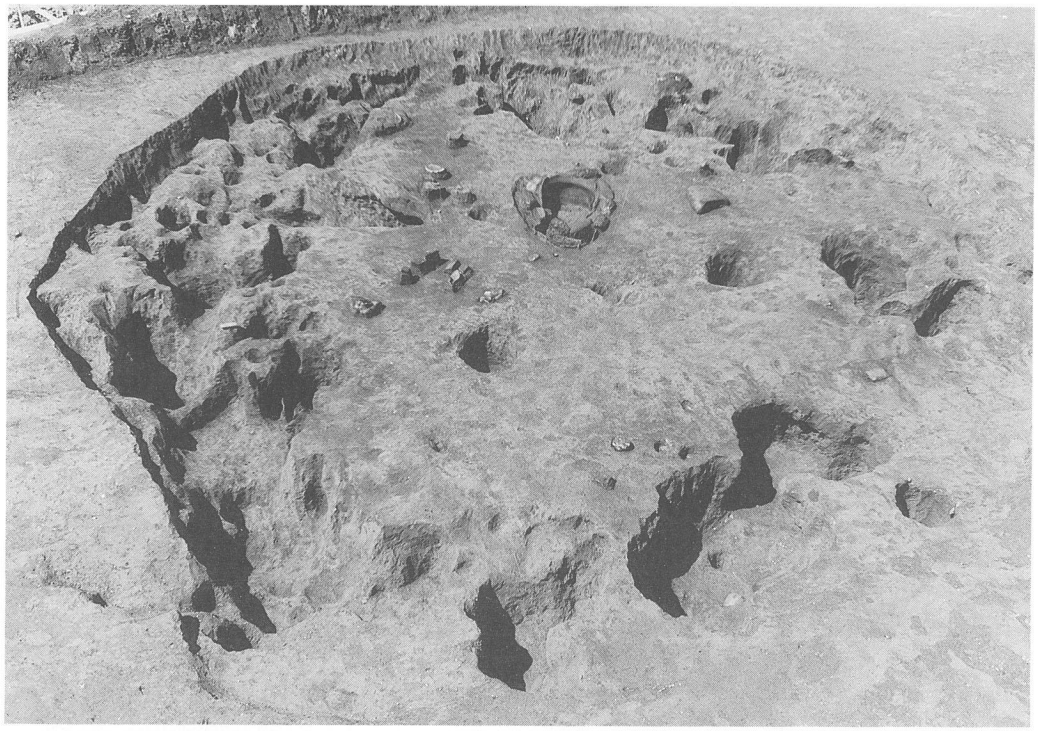
2 1号住居址 遺物出土状況 2



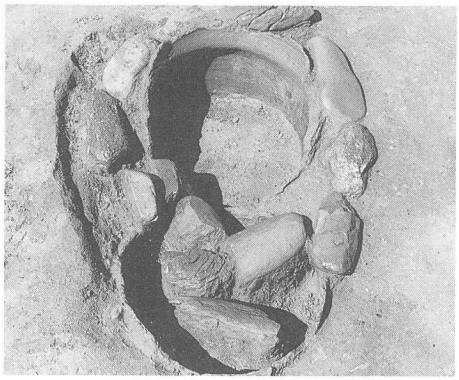


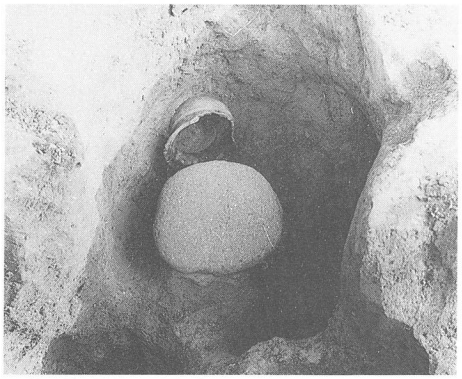
21号住居址 遺物出土状況 3

図版6

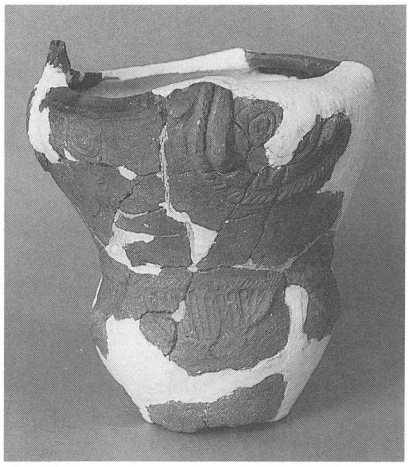


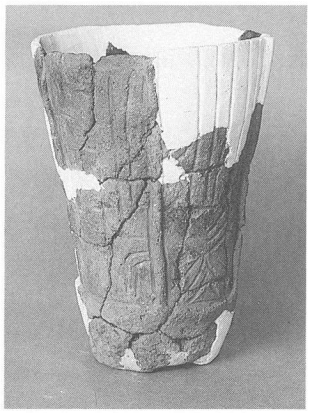
22号住居址

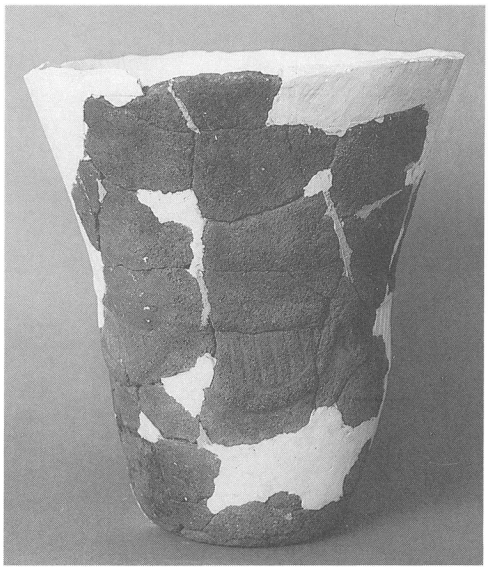




22号住居址 炉・遺物出土状況

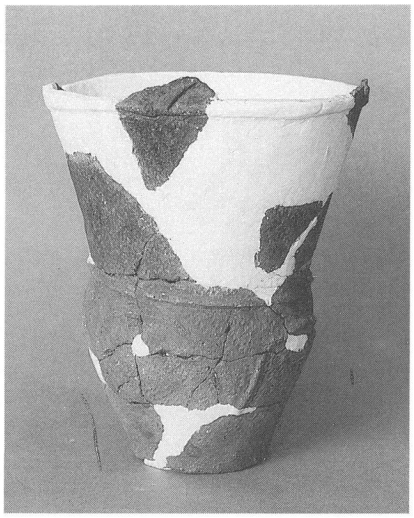


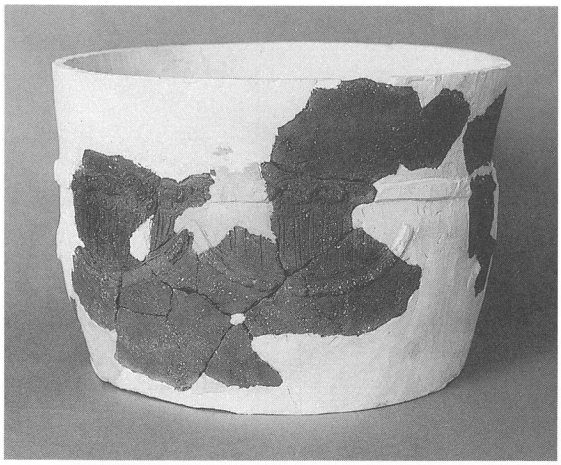


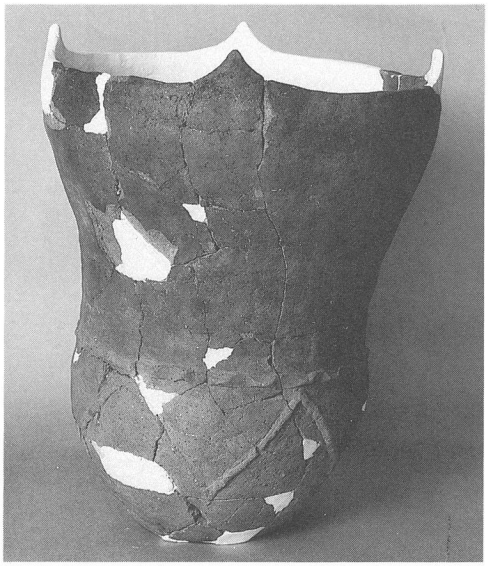


2 1号住居址 出土土器 1

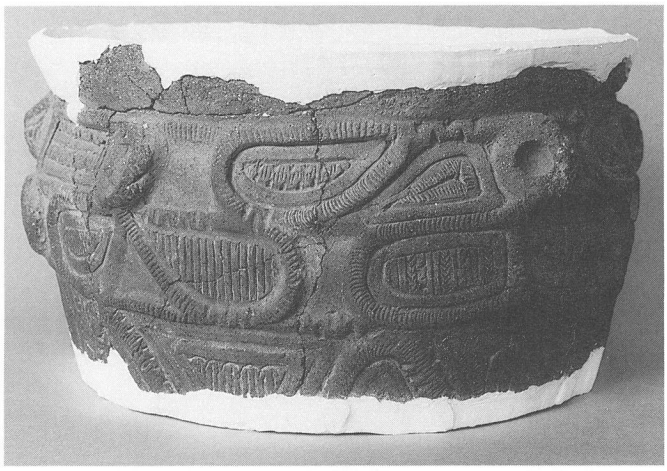
図版8

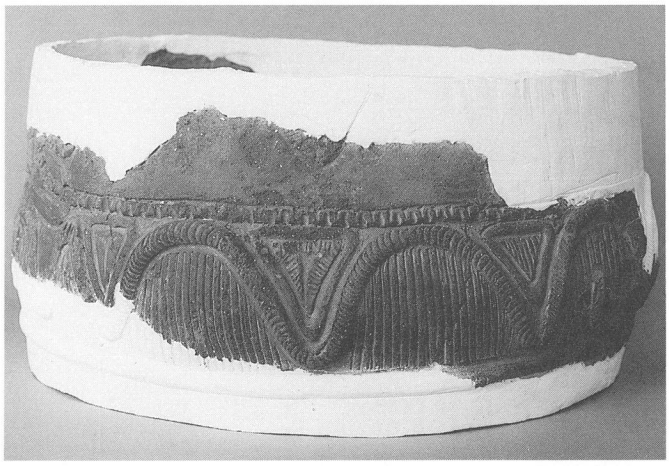


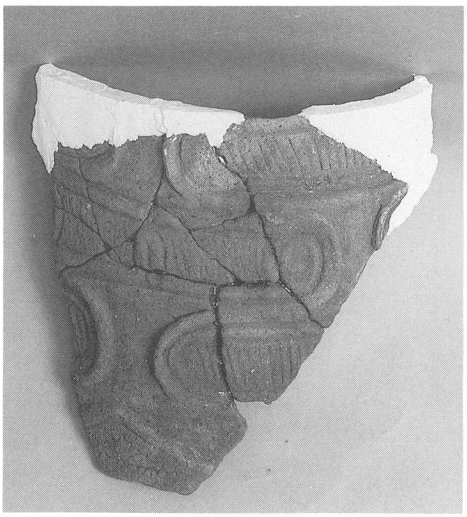




21号住居址 出土土器2

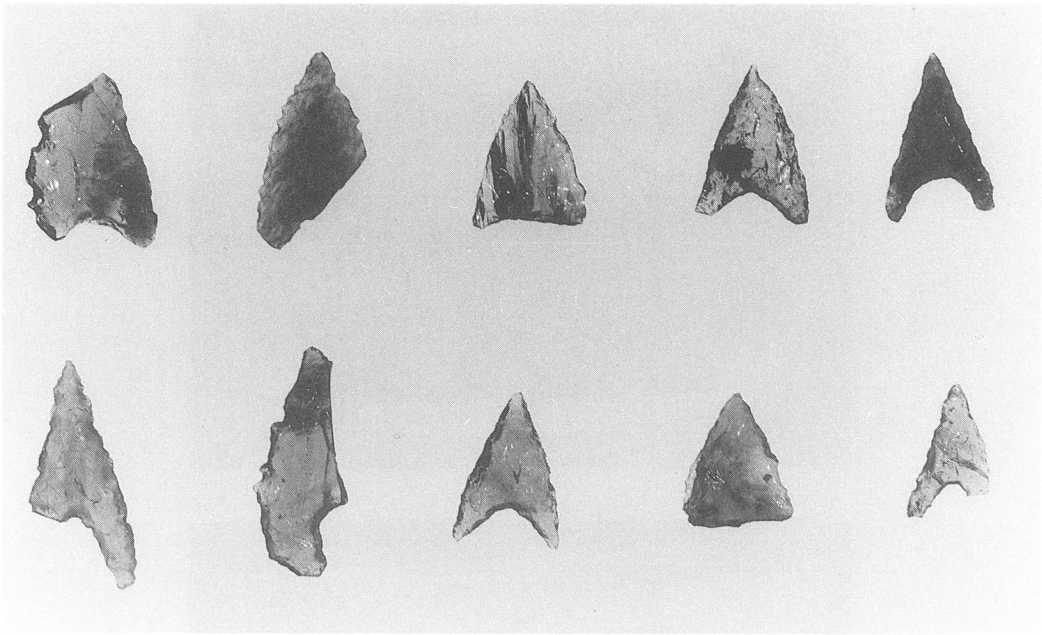




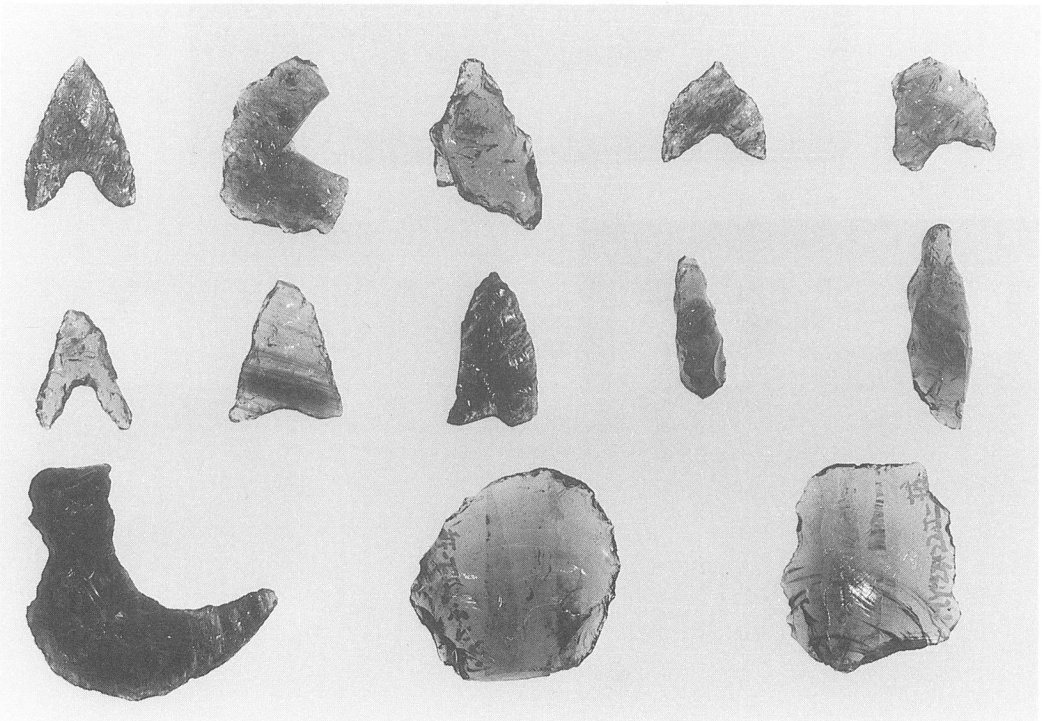


2 2 号住居址 出土土器

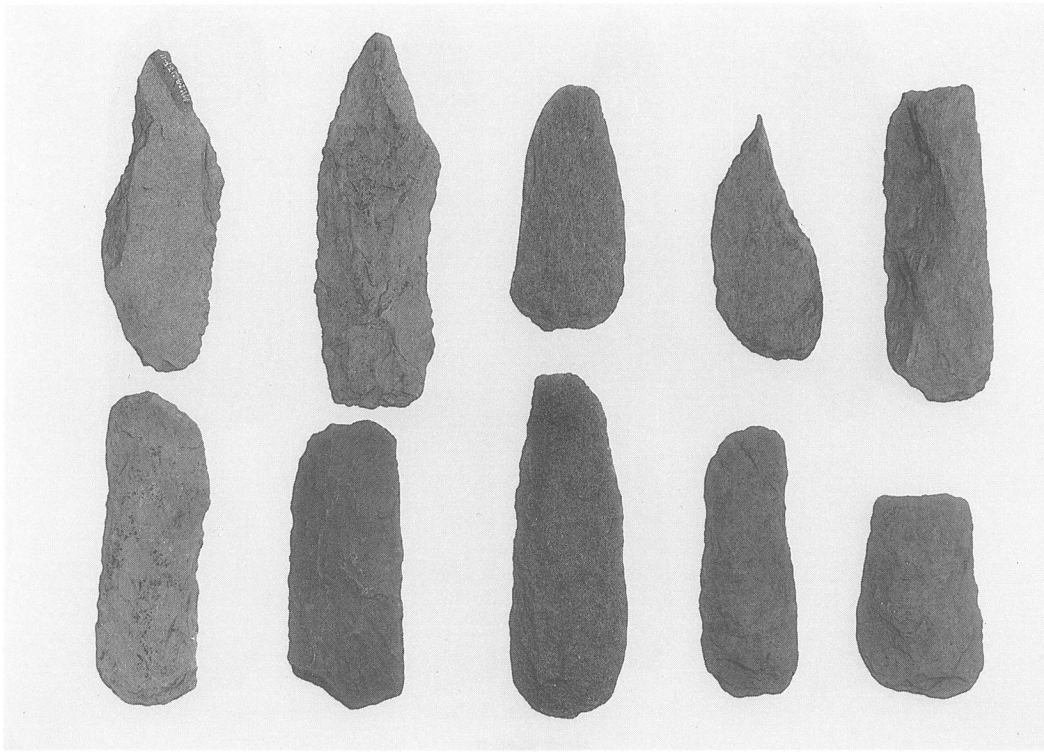
図版10



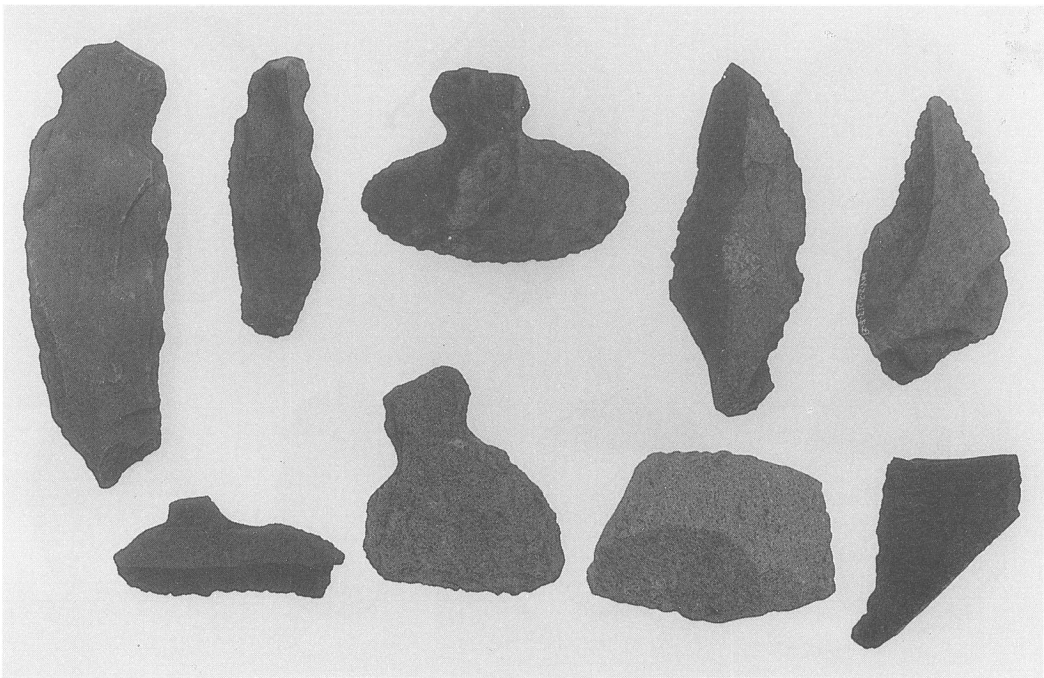
出土石器 1



出土石器 2

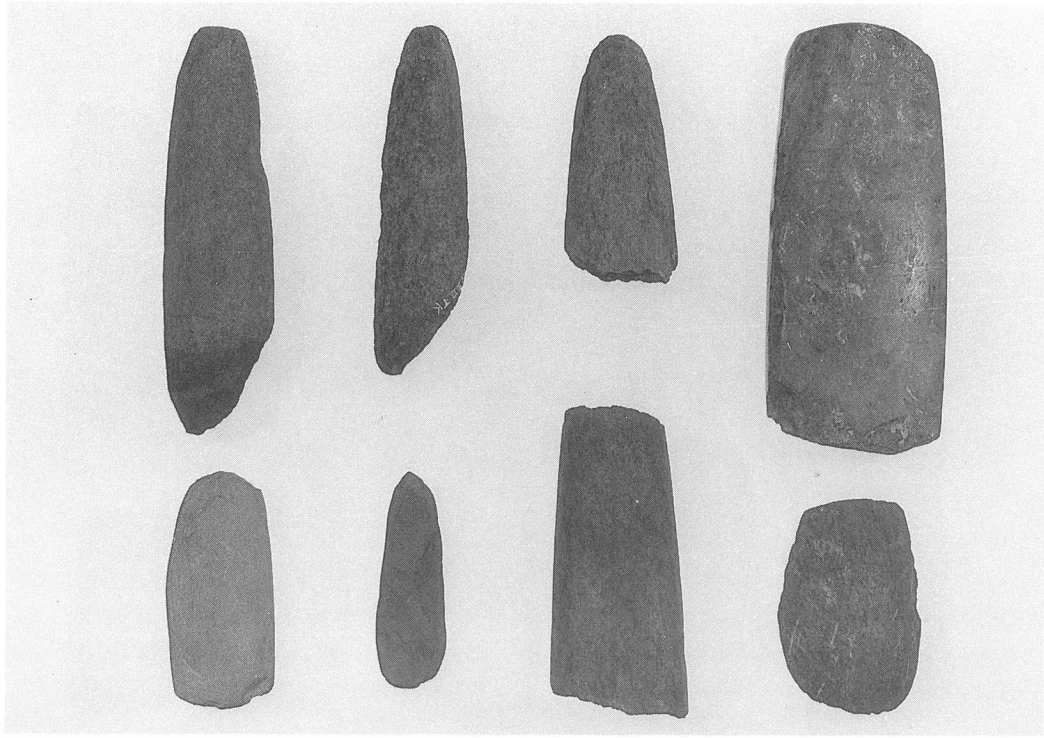


出土石器 3



出土石器 4

図版12



出土石器 5

出土石器 6

丸　山　遺　跡

国道１５３号線箕輪バイパス建設に伴う
丸山遺跡の第２次緊急発掘調査報告書

平成６年３月20日　印刷
平成６年３月20日　発行

発行所　長野県箕輪町教育委員会
印刷所　㈲　富　士　印　刷